【 三省製薬　News Letter 】

よりよい成分 よりよい化粧品
三省製薬株式会社

2026 年 10 月

～ 「コスメティック構想」を推進する佐賀県に製造拠点を置く三省製薬　～

海藻、米、イチゴの若葉など、佐賀県の自然素材を美容成分に変え、化粧品へとつなげる三省製薬の開発力

美容成分と化粧品の開発・製造・販売と、オリジナル化粧品ブランド「デルメッド」、「IROIKU（イロイク）」、「yameKAGUYA（やめかぐや）」を展開する三省（さんしょう）製薬株式会社（本社：福岡県大野城市　代表取締役社長：陣内 宏行）では、当社の企業・事業動向やトピックスをニュースレターとして定期的に発信しています。

1960 年に創業した当社は「よりよい成分、よりよい化粧品」をコンセプトに掲げ、事業に取り組んできました。主に自然由来の素材から独自に開発した美容成分は、美白（*1）有効成分「コウジ酸」をはじめ、140 種類以上にのぼります。美容成分を開発する「成分力」、その特性を生かす「配合力」、化粧品として仕上げる「製剤力」を生かして、化粧品づくりを行っています。

今回のニュースレターでは、当社が製造拠点を置く佐賀県に着目し、海藻、米、イチゴの若葉など、県産の自然素材から開発した美容成分をご紹介します。佐賀県では、産学官連携による「コスメティック構想」が推進されており、当社も、県内の研究機関や生産者とのつながりを生かしながら、美容成分の開発に取り組んでいます。あわせて、当社で美容成分の開発を担う「素材開発部」の取り組みや考え方、開発した美容成分を化粧品へとつなげる、当社ならではの“ものづくり”をご紹介します。

*1：美白とは、メラニンの生成を抑えてシミ・ソバカスを防ぐことです。

■　美容成分開発の“入口”は3つ。肌悩み、素材の面白さ、外部とのつながり　～佐賀県産の素材から開発した美容成分をご紹介。

「素材開発部」での美容成分の開発は、いつも同じきっかけから始まるわけではありません。大きく分けて、以下の 3 つの入口があります。実際の開発では、一つだけでなく、複数の入口が重なり合うこともあります。

① シミやシワ、毛穴、育毛など、肌や髪の悩みから、それに応える素材を探す
② 興味深い素材に着目し、どのような美容機能があるかを探る
③ 大学や研究機関、生産者など、外部とのつながりや研究成果をきっかけに開発する

ここでは、当社の工場が立地する佐賀県産の自然素材から開発した、特徴的な美容成分をご紹介します。

例えば、佐賀県産のブランドいちご「いちごさん」の若葉から抽出して完成した「イチゴ若葉エキス（*2）」は、研究機関（佐賀県工業技術センター）と当社による共同研究から生まれた成分です。「佐賀県素材で次世代美容機能を持つ美容成分を開発したい」という考えと、「毛穴の悩みにアプローチする美容成分を開発したい」という機能面からのニーズの両方が出発点となりました。佐賀県産のさまざまな素材について、抽出条件を変えながら探索を重ね、その中でいちごの実の部分ではなく、「30cm 以下の若葉」に抗酸化作用の高いポリフェノールである「エラグタンニン」が多く含まれていることを発見し、成分開発に至りました。これは、「外部との共同研究」と「肌悩み（毛穴の悩み）から探す」という二つの入口が重なった例です。原料となる若葉の確保にあたっては、現在、佐賀県内の 2 軒の生産農家と取引しています。生産者の顔が見え、産地や生産の背景まで伝えられることは、美容成分を他社へ提案・販売する際のアピールポイントにもなっています。





また、佐賀県松島産の海藻「ノコギリモク」から抽出した「ノコギリモクエキス（*3）」は、佐賀県工業技術センターの研究成果を起点とした開発によるものです。同センターが玄界灘周辺の海藻を調査する中で、「ノコギリモク」に抗炎症作用があることを見いだした基礎研究をもとに、当社が化粧品原料としての開発を進めました。特有の苦みがあり、美味しくないため、食用とされていなかった「ノコギリモク」から新たな価値を生み出したパターンです。海藻由来という意外性のある美容成分として、注目されています。

そして、「ライスミルク発酵液（*4）」は、佐賀県産の米「夢しずく」を 100%使用し、乳酸菌で発酵させて開発した美容成分です。米に含まれるアミノ酸などに着目し、当社が得意とする発酵技術を組み合わせることで、保湿成分を豊富に含む美容成分として完成しました。化粧品のベースとして一般的に使われる精製水に代えて配合できるよう、保湿力だけでなく色やニオイにも配慮し、無色透明で使いやすいアミノ酸リッチな美容成分として、Ｂ２Ｂだけでなく、一般のお客様の関心も呼んでいます。このように、地域の自然素材に着目し、自社が培ってきた技術をどう組み合わせるかという発想も、美容成分開発の一つの入口になっています。



佐賀県は、農産物から海産物まで素材の幅が広いことに加え、生産者や研究機関との距離が近いことも特徴です。素材の生産現場や生産者を身近に知ることができる環境は、素材への理解を深めるだけでなく、美容成分を他社へ提案・販売する際にも、産地や生産者を含めた素材の背景を伝えられる強みになります。地域とのつながりを生かしながら素材を探し、科学的に評価し、美容成分へと仕上げていくことも、当社の素材開発の特徴の一つです。

*2：イチゴ若葉エキスの詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/110 （三省製薬による実験）
*3：ノコギリモクエキスの詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/109 （三省製薬による実験）
*4：ライスミルク発酵液の詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/84 （三省製薬による実験）

■ 「素材開発部」では、研究員が自らテーマを考え、美容成分の素材探しから量産化まで担当。

「素材開発部」では、取締役の伊賀和宏のもと、現在 3 人の研究員が開発に取り組んでいます。少数精鋭の体制で、シミやシワ・育毛などの肌と髪の悩みの解決という大きな方針のなかで、一人ひとりが自ら開発テーマを考え、提案します。

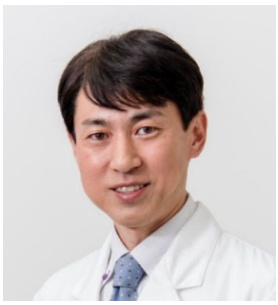
植物や微生物など自然界にあるさまざまな素材に目を向け、素材探しから抽出方法の検討、有効性・安全性・安定性の評価、規格の設定、量産化まで、一連の開発工程に関わります。一つのテーマを、一人の研究員が製品化まで担当するのが基本です。

美容成分の開発では、特徴のある有効性を見いだすことが重要な出発点です。しかし、単に「効果のあるエキス」を見つけるだけではなく、有効性、安全性、安定性、製造方法、品質などを一つずつ確認し、「同じ品質でつくり続けられる美容成分」に仕上げるところまでが開発になります。

このように、素材を見つけて「これを美容成分にできないか」と考え、実験し、実際に製造するところまで一貫して担当できるのは、「素材開発部」の大きな特徴です。



素材開発部の研究員
（左から）水元 康裕、真茅 紗那、城戸 拓巳、伊賀 和宏



取締役　素材開発部部長
伊賀 和宏

私は約 23 年、三省製薬で美容成分の開発に携わってきました。
自分の経験から感じるのは、一人の研究員が自らテーマを考え、最後の製品化まで担当するからこそ、途中で簡単には諦めず、最後まで向き合う粘り強さが生まれるということです。また、その素材への愛着やこだわりも、自然と生まれてきます。
自分が担当した美容成分が、最終的に化粧品として形になっていくところまで見届けられることも、当社の素材開発の面白さの一つだと思います。

美容成分の開発で研究員に求められるのは、実験や分析によってデータを得るだけではなく、「その結果を見て仮説を立て、次に何を試すか」を考えるスキルといえます。知識や経験、セオリーの延長だけで考えるのではなく、一段飛び越える「発想力」や「ひらめき」のチカラ、センスが必要になります。

また、研究分野の中だけにとどまらず、さまざまなものに触れ、幅広い情報に接し、世の中の動きにも目を向けることが大切です。広い視野でものを見ることによって得た気づきが、新しい素材への着目や、実験結果を見たときの「次の一手」の着想につながると考えています。

期待した結果が得られなかった実験も、次の開発につながる知見となります。例えば、「イチゴ若葉エキス」では、素材の候補を探す過程で、ライチやノリなど、さまざまな佐賀県産素材を活用し、抽出条件を変えながら 40 種類以上のエキスをつくり、評価しました。最終的に美容成分には至らなかった素材や条件についても、多様な実験結果は、次に素材を選んだり実験方法を考えたりする際の知識として蓄積されていきます。

■ 開発した美容成分を、化粧品へ。素材開発部と製品開発部が連携する、当社ならではの“ものづくり”。

「素材開発部」が開発した美容成分を、当社のオリジナルブランド「デルメッド」や「IROIKU」などの製品に配合し、化粧品として形にしていくのが「製品開発部」です。製品開発部では、商品の目的や処方に合わせて、美容成分をどのくらい配合するのか、製剤の中で安定しているか、期待する機能を生かせるかなどを検討しながら、化粧品づくりを進めています。

新たに開発した美容成分について、素材開発部から、その特徴を生かせる商品を製品開発部へ提案することもあります。また、実際に化粧品へ配合してみることで、初めて見えてくる課題もあります。例えば、開発中の粉末状の美容成分を化粧品に配合しようとした際には、溶けやすさの面で課題が見つかり、素材開発部と製品開発部で情報を交換しながら、製品化に向けた検討を進めたこともあります。
このように、美容成分の開発と化粧品の開発を社内で連携させながら、価値の最大化を図っていくことができるのは、当社ならではの“ものづくり”です。

前段でご紹介した佐賀県産の自然素材から開発した美容成分も、実際に当社のオリジナルブランドの化粧品に配合されています。

● イチゴ若葉エキス　―「デルメッド 毛穴クリアオイル」

「イチゴ若葉エキス」は、毛穴が目立つ原因の一つである皮脂に着目して開発した美容成分です。今年の 7 月に新発売した毛穴用ディープクレンジング「デルメッド 毛穴クリアオイル」に配合しています。佐賀県工業技術センターと当社による実験では、皮脂の主成分である「トリグリセリド」の産生を抑制することを確認しています。
また、「イチゴ若葉エキス」に加え、毛穴の悩みに異なる方向からアプローチする「ゼニアオイエキス（*5）」、「ドクダミエキス（*6）」、「油溶性ヨクイニン抽出液（*7）」を配合しています。さらに、水溶性の美容成分を特殊な膜で包み、オイルの中に溶かし込む独自技術「オイルエッセンス フュージョン テクノロジー」を確立。水溶性の美容成分を配合しにくいオイル製剤に、これらの美容成分を配合する処方も実現しました。



デルメッド 毛穴クリアオイル

*5：ゼニアオイエキスの詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/86 （三省製薬による実験）
*6：ドクダミエキスの詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/40 （三省製薬による実験）
*7：油溶性ヨクイニン抽出液の詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/36 （三省製薬による実験）

● ノコギリモクエキス —「デルメッド サンケアジェル」

「ノコギリモクエキス」は、今年 3 月にバージョンアップ発売した顔・ボディ用のジェル状化粧水「デルメッド サンケアジェル」に新たに配合しています。紫外線や大気汚染物質など、外部刺激によって肌内部で起こる炎症“かくれ炎症”をケアする商品です。

従来から配合していた「キンギンカ抽出液（*8）」、「黄山薬抽出液（*9）」などに、新たに抗炎症作用を持つ「ノコギリモクエキス」を加えることで、炎症につながる連鎖反応に異なる方向からアプローチします。素材開発部で新たに開発した美容成分を既存商品の処方に生かし、商品の機能性向上につなげました。



デルメッド サンケアジェル

*8：キンギンカ抽出液の詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/10 （三省製薬による実験）
*9：黄山薬抽出液の詳細 https://www.sansho-pharma.com/lab/105 （三省製薬による実験）

● ライスミルク発酵液 —「IROIKU フェイシャル ウォーター」「デルメッド 泡洗顔」「デルメッド ウォッシング フォーム」

「ライスミルク発酵液」は、化粧品の基剤となる水の代わりに使用できることが大きな特徴です。

この特徴を生かした代表的な商品は「IROIKU フェイシャル ウォーター」です。
化粧水のベースとなる水をライスミルク発酵液に置き換えることで、水を一切使用せず、96%以上（*10）を美容成分で構成した処方を実現しています。

*10：ライスミルク発酵液、豆乳発酵液、トゥルシーエキス、ローズヒップエキス、ハトムギエキスの合計量。



IROIKU フェイシャル ウォーター

さらに、今年 5 月に発売した「デルメッド 泡洗顔」と「デルメッド ウォッシング フォーム」にも、基剤となる水の代わりにライスミルク発酵液を使用しています。
洗浄剤を多く配合する洗顔料は、美容成分の配合量を増やしにくいという処方上の課題がありますが、基剤の水そのものを美容成分である「ライスミルク発酵液」に置き換えることで、美容成分を豊富に配合した処方を実現しました。

「デルメッド 泡洗顔」は 3 層メッシュ構造のポンプで、プッシュするだけできめ細かな泡をつくれる泡タイプの洗顔料です。
「デルメッド ウォッシング フォーム」は、手のひらで弾力のある泡をつくって洗うクリームタイプで、美容成分を見直してバージョンアップしました。
いずれも、余分な皮脂や汚れを落としながら、洗顔後のうるおいを守ることを目指した商品です。



デルメッド 泡洗顔（左）
デルメッド ウォッシング フォーム（右）

■ 三省製薬株式会社　会社概要

■社　名	三省製薬株式会社（Sansho Pharmaceutical Co.,Ltd.）
■創　業	1960 年 3 月
■代表取締役社長	陣内　宏行
■資本金	8,767 万円
■売上高	22 億 2,448 万円　（2026 年 3 月期）
■事業所	＜本社＞ 〒816-8550　福岡県大野城市大池 2 丁目 26 番 7 号 ＜佐賀工場＞ 化粧品原料製造および化粧品製造業者として COSMOS 認証取得工場、 ISO9001、ISO22716（化粧品 GMP）取得工場 〒841-0048　佐賀県鳥栖市藤木町 5 番 1
■事業内容	化粧品原料の開発、製造、販売 医薬部外品・化粧品の開発、製造、販売（自社ブランド・OEM）
■従業員数	100 人
■URL	https://www.sansho-pharma.com https://www.dermed.jp https://www.iroiku.jp https://yamekaguya.com

【　本件に関するマスコミの方のお問い合わせ先　】

三省製薬株式会社　東京広報事務局　：　(株)パラフ内　小林 央子
TEL　090-4093-8820　（お電話の場合は携帯優先でお願い申し上げます）
03-6455-1438
FAX　03-3437-3303
E メール　nakako@parafu.co.jp